

第3学年 英語科学習指導案

3年3組 男子23名 女子17名 計40名

指導者 高野 佳之

【授業】 9:50~10:40 会場 3年3組(4階)

【協議会】 10:50~12:00 会場 3年3組(4階)

1 単元名 Our message to Taiwan

2 単元について

(1) 単元設定の趣旨

本単元では、台湾から留学に来た富山大学の学生に対し、「自分たちの言葉で富山の魅力を伝え、心に残るおもてなしをしたい」という願いを具体化したプロジェクト型単元である。この活動に至る前段階として昨年度より生徒たちは「台湾の仲間をどのように迎え、どのような時間を共に過ごすことがベストなのか」について、議論を重ねてきた。その中で、「教師によって設定されたプログラムをこなすだけでなく、自分たちの言葉で富山の素晴らしさを伝え、相手の心に強く残るおもてなしをしたい」という生徒自身の願いが生まれ、今回の「富山の魅力を紹介する原稿づくり」という活動が決定した。このように、生徒自らが交流のあり方を構想し、その実現のために英語を話すことへの必要感が創出されたことが、本単元の出発点である。

台湾の学生との直接的な交流は、従来の教室内での英語学習とは異なり、「英語が通じた」「相手の心を動かせた」というよりリアルな成功体験や、逆に「上手く伝わらなかった」という即時的なフィードバックを体感することができ、本校の生徒の英語学習にとって大きな利点をもたらすと考える。また、共通の関心事をもつ異国の同世代という明確な「相手意識」は、生徒にとって教科学習の枠を越え、表現意欲を喚起させるだろう。これは、異文化間でのコミュニケーション能力の向上のみならず、「もっと伝わる英語を学びたい」という今後の英語学習に対する持続的な動機付けとなる。

中学校学習指導要領外国語科の目標には、「外国語の背景にある文化などに対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて適切に伝える」ことが示されている。特に「話すこと【発表】」や「書くこと」においては、単なる事実の伝達に留まらず、自分の考えや気持ちを理由や根拠とともに整理し、聞き手の興味や関心を引くよう工夫する力が求められている。

既習の言語材料を用いて身近な話題について述べる基礎的な力は定着しつつあるが、社会的な話題について話す場面では、表現が事実の羅列に終始しやすく、聞き手の心を動かすような具体的な描写や語彙の選択には課題が見られる。また、自分の作成した英文を「聞き手の視点」から客観視し、改善する「自己調整学習」のプロセスにおいて、何を基準に改善すべきかという基準を主体的に見いだすことが難しい。

そこで本単元では、この課題を解決するための主要な手立てとして、「小グループによるランゲージング」と「生成AIによる添削・アドバイス」を行う。ランゲージングの活動を通じ、生徒は自らの表現したい事柄や意図を級友に向かって言語化する。言語について言語で語るこのプロセスは、自らの思考を外化させて知識の欠落や曖昧さに自ら気付いたり、表現の内容を深化させるためにはどのような文章を書き加えればよいかを考えたりして「メタ認知的モニタリング」を強力に活性化させる。さらに生成AIを対等な「思考のパートナー」として活用させ、AIが提示する多様な語彙や表現の選択肢を、生徒が自らの意図と照らし合わせて吟味し、取捨選択する過程を設ける。

以上の手立てを通して、生徒には、生徒自身が望む「台湾の中学生に富山の魅力を伝える」とい

う目的を達成するための表現力のみならず、他者やテクノロジーとの対話を介して自らの学びを客観視し、より高次の表現へとアップデートし続ける「自立した学習者」としてのメタ認知能力を身に付けさせたいと考えている。

(2) 生徒の実態

台湾の同世代の仲間をどのように迎えるのがよいかについて議論したり、台湾について調べたりすることを通して、台湾との交流に向けて強い意欲をもっている。また、既習事項を用いて自分の意見を述べたり、理由や事実を伴って発表したりする力は概ね身に付けている。しかし、富山の魅力を紹介する原稿を作成する段階になると、表現が単なる事実の羅列に終始しやすく、相手の心を動かす具体的な語彙の選択や、自身の思いを既習の英語表現への落とし込みに困難を感じるだろう。また、自分の書いた英文を客観視し、推敲（自己調整）することや具体的な語彙の選択や自身の思いを既習の英語表現に言語化することにも困難を感じる姿が予想される。そこで本単元では、自らの表現意図を言語化する「ランゲージング」と、解決の手掛かりとなる「生成 AI による表現の推敲」の手立てを講じる。仲間や AI との対話を通じてメタ認知能力を働かせ、自分の英語運用能力の不足に自ら気づき、修正していくプロセスを経ることで、生徒が表現の幅を広げ、相手意識に基づいた質の高い紹介原稿へと主体的に改良できる力を育みたい。

(3) 本単元の指導の構え

・小グループによるランゲージング

本時では、自らの原稿の発信意図を級友に向けて言語化する「ランゲージング」を導入する。ランゲージングの中で、級友から「日本語での豊かな発想や熱量が、まだ英語の表現に反映しきれていない」といった客観的な指摘を受けたり、リアルな反応を得たりすることで、生徒は「自分の英語には語彙や具体性が不足している」と自身の課題に気付かせたい。さらに、「台湾の同世代だったら、こういう話の方が興味あるよね」と共感しながら話し合わせることで、生徒は「自分が書いた内容が、相手の立場でどう受けとられるか」を客観的に見つめ直し、ランゲージングによって何を伝えるべきかという内容面でのメタ認知的モニタリングを深めさせたい。

・生成 AI による表現の推敲

ランゲージングで見いだされた課題を解決する手段として、生成 AI を「思考のパートナー」として活用する。AI は、生徒のプロンプト（指示文）に応じて、自分たちの既習の語彙だけでは表現しきれなかったニュアンスを補い、多様な代替表現（類義語等）を提示する。これにより、生徒は表現のバリエーションに気付くことができ、自分だけでは思いつかなかったより豊かな英語表現を引き出すための効果的なサポートとなると考える。生徒は AI が提示した複数の表現を鵜呑みにせず、「自分たちの言葉として台湾の学生に響くか」という視点で表現を批判的に吟味・選択する。こうした決定権を生徒自身にもたせることで、英文の質と共に学習者の自立性を向上させたい。

本単元では、「仲間との協働（ランゲージング）」と「生成 AI の活用」の強みを棲み分けさせる。仲間との協働の強みは、同じ中学生という立場から「文脈の共有」や「共感」をベースに、発信内容の妥当性（何を伝えるべきか）をリアルな他者目線で吟味できる点にある。一方、生成 AI の強みは、生徒の限られた語彙力では到達できない客観的かつ膨大な言語資源（どう表現すべきか）を瞬時に提示できる点にある。この両者を意図的に往来させ、AI が提示した多様な選択肢を、仲間との対話で再確認した「相手意識（台湾の学生にどう届くか）」に基づいて選択させる。このように、目的・状況・場面に応じて自らの表現を最適化させる経験を通じ、主体的に学びを調整する態度を育む。

3 研修主題・副題との関連

本単元では、台湾から留学に来た学生に富山の魅力を紹介する目的を理解し、台湾の学生に富山の魅力を感じてほしいという自身の思いを英語表現に込めて伝えようとする生徒を「自立した学習者」とした。原稿を作成・推敲する際は、自身の表現意図と現在の英文との乖離を客観的に把握し、よりふさわしい語彙・表現を選択し自身の原稿に取り入れるために、仲間との「ランゲージング」や「生成 AI との対話」という活動を工夫する。また、本時の学習課題を全体で共有することで、「台湾の学生に自分たちの思いがより伝わるよう、原稿を魅力的なものへとブラッシュアップする」という課題の解決・追究を目指す。

生徒の「台湾の学生に伝えたい」という切実な目的意識を起点とし、自らの表現意図と現在の英文との間にある乖離を「メタ認知的モニタリング」によって客観的に把握させたい。具体的には、仲間とのランゲージングを通じて、自分の思いが英語で十分に表現しきれていない現状に自ら気付くことで、補うべき具体的な語彙や表現の質といった「自らの改善すべき点」をその場で明確に捉えさせる。その解決に向けた「メタ認知的コントロール」の局面では、生成 AI を有効な学習方略として活用し、提示された多角的な選択肢の中から、自身の表現意図や相手意識に最も合致するものを選択・修正する。このように、仲間との共感的な視点と AI の豊富な言語資源を往来しながら、メタ認知的モニタリングとコントロールを繰り返し、原稿を磨き上げる活動を通して、主体的に学びを調整しようとする態度の育成を図る。

4 単元の目標

- 富山の魅力を紹介するために必要な語彙や表現、および情報を効果的に伝えるための文章構成を理解し、それらを用いて自分の考えや紹介したい内容を適切な英語で書くことができる。
(知識及び技能)
- 台湾の学生の関心を想像して紹介する内容を選び、相手に富山の魅力が伝わるような紹介原稿を書くことができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- 「富山の魅力を自分たちの言葉で伝えたい」という目的意識をもち、仲間との対話や生成 AI のアドバイスを、自らの表現を見直すための手掛かりとして活用しながら、相手意識に基づいたより良い表現へと原稿を粘り強く推敲しようとしている。
(学びに向かう力、人間性等)

5 全体計画 (全 7 時間)

第 1 次	台湾の学生の生活や、名所等について知る活動	…………… 2 時間
第 2 次	紹介するトピックを決定し、紹介文の原稿を書いたり推敲したりする活動	…………… 2 時間 (本時 1 / 2)
第 3 次	推敲した内容を反映させてリライトし、提示用の視覚資料 (写真等) を整えて原稿の完成を目指す活動	…………… 1 時間
第 4 次	完成した原稿を基に、グループでの発表練習	…………… 1 時間
第 5 次	台湾から富山大学に来ている学生との交流会、紹介文の発表	…………… 1 時間

6 本時の学習（全3／7時間）

(1) 指導目標

- 台湾の学生の関心を想像して紹介する内容を選び、相手に富山の魅力が伝わるような紹介原稿を書くことができる。

(2) 展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 英語の歌を歌う。 全体</p> <p>2 前時の振り返り。 全体⇄個</p> <p>T: We have a special event next month. What is that?</p> <p>S: Junior high school students from Taiwan are coming to Toyama and our school.</p> <p>T: Exactly. What do you want to do for them?</p> <p>S: I want to introduce Toyama.</p> <p>T: Good. What do you want to introduce about Toyama?</p>	<ul style="list-style-type: none"> 台湾の学生の訪問が自分事として捉えられるように、前時で写真を提示したり、その写真をヒントにやり取りをしたりして、学習意欲を喚起させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">台湾の学生に富山の魅力が伝わるような紹介原稿を書こう。</div>	
<p>3 何を紹介したいかについてやり取りを行う。 個⇄ペア</p> <p>【生徒同士の対話例】</p> <p>S1: What do you want to introduce about Toyama?</p> <p>S2: Toyama has delicious food. I want to tell them about it.</p> <p>S1: Do you have any examples?</p> <p>S2: I want to introduce black ramen.</p> <p>S1: Why do you want to introduce it?</p> <p>S2: It is famous. I also eat it often. I really want them to eat it.</p> <p>4 ペアで発話した内容について全体で共有する。 全体⇄個</p> <p>【目指す発話例】</p> <p>T: What do you want to introduce about Toyama?</p> <p>S: I want to introduce black ramen.</p>	<ul style="list-style-type: none"> 言いたいことが表現できずに戸惑っている生徒には、既習事項で表現を言い換えるなど、個別に支援を行う。 生徒とのやり取りの内容から、生徒自身の意見やその理由が抽象的であれば、内容を深める質問をし、より詳細に自身の考えを表現できるようにする。 生徒が意見を構築しやすくなるよう発問に対

T: Nice choice! It's famous. But why do
 T: you want to introduce it? What makes
 T: it special for them?
 S: Well... it's black. And it's very popular
 T: in Toyama.
 T: Is it just color? Do you have other
 T: good points about it?
 S: It's very salty and has a lot of pepper!
 T: Good! Taiwanese people love noodles.

しての答えをキーワードとして板書する。

5 目指す紹介原稿を書くための視点を共有する。 全体⇔個

【視点の共有の際に留意したい事項】

- ・ 具体性→数値や事実、五感
- ・ 対比・根拠→台湾との比較、ギャップ
- ・ 書き手の個性→実体験・自身の考え

6 これまでのやり取りを参考に紹介原稿を書く。 個
 Toyama has many beautiful places to visit. One of them is Mt. Tate. You can see a big snow wall there in spring. I think it is very wonderful.

- ・ どのような紹介原稿を目指すかの確認や、全体で共有した視点を提示する。
- ・ 机間指導を行い、表現や語句に戸惑う生徒に個別に支援を行う。

7 小グループによるランゲージングを行う。 個⇔グループ

- ・ アドバイスが文法ミスの修正だけに終始しないよう、「台湾の同世代として、この説明でワクワクするか？」という「内容の妥当性」と「相手意識」に焦点を当てた対話を促す。
- ・ 「ここを詳しく教えて」「これってどういう意味？」といった、発信者の「説明不足」に気付かせるための問いかけ例を提示し、生徒同士のメタ認知的モニタリングを活性化させる。
- ・ 単なる情報の羅列（事実のみ）にならないよう、共有した視点に基づいて原稿を推敲するよう助言する。

8 級友からのアドバイスを基に、自身の英文を見直し、推敲する。 個
 I want to introduce Mt.Tate. Taiwan is very warm, right? But in Mt.Tate, you can walk through a 20-meter snow wall in spring! I went there last year. I have touched the giant wall. It was freezing but amazing. We see Mt.Tate from our school window every day. I want you to take a picture of Tateyama.

台湾の学生の関心を想像して紹介する内容を選び、相手に富山の魅力が伝わるような紹介原稿を書くことができる。
 (思考・判断・表現) **【観察】**

9 次時の確認をする

7 授業観察の視点

- 本単元での目標にむけて、小グループでのランゲージングは、自身の課題に気付いたり、「自分が書いた内容」を客観的に見つめ直したりするなど、何を伝えるべきかという内容面でのメタ認知的モニタリングを働かせる上で有効であったか。

8 本単元における学習評価のルーブリック

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	これまでに学習した表現を想起し、適切に使いこなし、文法的な誤りもほとんどなく正しく書くことができる。	3つの視点(具体性、対比・比較、書き手の個性)のうち、全ての視点に基づいて紹介原稿を書いている。	グループ活動で、3つの視点(具体性、対比・比較、書き手の個性)をもって級友の文に進んでアドバイスを送り、もらった意見を参考に自分の英文を最後まで粘り強く推敲しようとしている。
B	多少の文法的なミスはあるものの、既習の文型や本時で提示された表現を使って、意味が通じる英文を書くことができる。	3つの視点(具体性、対比・比較、書き手の個性)のうち、2つの視点に基づいて紹介原稿を書いている。	級友と協力してお互いの紹介文をアドバイスし合ったり、自分の文を直そうとしたりしている。
C	単語の羅列になっていたり、文法的な誤りが多かったりするなど、相手に意味が伝わらない英文を書いている。	3つの視点(具体性、対比・比較、書き手の個性)のうち、1つ書かれている。あるいは書かれていない。	グループ活動に消極的で、級友の文にコメントをしようとしめない。あるいは自身の英作文を推敲しようとしめない。